

銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註（五）

飯田 祥子

凡例

本稿は、「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註（一）」（『名古屋大学東洋史研究報告』二七、二〇〇三）・「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註（二）」（『名古屋大学東洋史研究報告』二八、二〇〇四）・「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註（三）」（『名古屋大学東洋史研究報告』二九、二〇〇五）・「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註（四）」（『名古屋大学東洋史研究報告』三〇、二〇〇六）に続く、銀雀山漢簡の訳註の一部である。前稿同様、底本として銀雀山漢墓竹簡整理小組『銀雀山漢墓竹簡（壹）』（文物出版社、一九八五、以下テキストと称する）を使用している。構成は、標題、原文、書き下し

文、註、訳文の順序からなる。その際、原文・書き下し文における数字は簡番号、□は一字不明、……は字数不明、【】は文意より欠字を補ったもの、（ ）は異体字もしくは通假字をそれぞれ意味する。また書き下し文に附した註は訳註者によるものであるが、必要に応じてテキストにある註釈を原註、劉海年・楊升南・吳九龍『中国珍稀法律典籍集成』甲篇第一冊（科学出版社、一九九四）の註釈を『珍稀』、早稲田大学簡帛研究会「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』の研究（四）王法篇・委積篇」（『中国出土資料研究』九、二〇〇五）の註釈を『早大』として紹介している部分がある。

王法篇

七^上

(1) 標題簡は未発見。原註は各簡の形式・字体が守法等の篇に似ており、篇中では「王者之道」を述べていることから、篇題木牘に記された王法篇に相当するだろう、とする。テキスト「編輯説明」は『十三篇』について「我々は各篇の篇題の意味にのっとって、相応する簡文を区別して整理した」といい、伝世文献に基づいて整理された守法・守令、王兵、兵令篇以外については、各篇内の前後関係はもとより、どの簡がどの篇に含まれるのかも客観的な根拠はなかったようである。すなわち、「王者」という語を含む911・916・919・920簡を中心に、接続する簡・内容上関連性が強いとみなされた簡を集めるなどして、王法篇は復元されたのであろう。つまり、テキストの言う王法篇の中には、本来『十三篇』の別の篇に属していた簡がまざれこんでいたり、逆に本来は王法篇であった簡が、『十三篇』の他の篇として復元されている可能性もある。またテキストの「出版説明」

で計画が発表されていながら、依然として刊行されることのない『銀雀山漢墓竹簡』の『第二輯』の「佚書叢残」、『第三輯』の「すべてのばらばらになった竹簡」のうちに王法篇の殘簡が含まれている可能性すら存在する。

本稿では整理小組の復元を尊重し、簡の接続関係が明確な文章ひとまとまりの意味の理解にはとどめるが、テキスト王法篇に収録された簡や篇内の配列についてはあくまで暫定的なものとしてとらえ、「篇」全体での統一した論旨を求めることはしない。

王法篇に収録された簡のうち、接続・文章のつながりが比較的確かなものは八部分に分けられる。内容を大まかにまとめると以下ようになる。

一、凡欲富國墾草初邑必外（898～901簡）
富国のためには農業を重視すべきであることを述べる。『管子』の重農策に似通っている。

二、……上家□畝四中家三（902～905簡）
民の蓄えと葬儀の物品について述べ、自然資源の利用に關する議論が続くよう。数字や単語が田法篇に収録された簡群と共通する。

三、……而帰之少者曰我且（906～907簡）

民に好ましい政治を行ったため、外から移住者が殺到する、とのことか。

四、矣臣聞之大國行仁義明（908～915簡）

「臣聞……」の節で、①国家間の秩序関係について、②「古之王者」の民、③「霸王之国」での民の扱い、の三部に分かれる。句を引用し、そこから独自の主張を展開しているようである。

五、□□能審此三者霸王之（916簡）

「霸王」たる上で重要なことを述べた文章のまとめの部分。

六、……□□□□之□□□（917簡）

断簡・文字が不鮮明のため不明。

七、富國也所以強兵也所以（918～919簡）

富国から王者までの因果関係を述べる。一文のまとめの部分であろう。

八、……帝者謂人黔人王者（920簡）

統治者と被統治者の呼称が羅列される。

九、……法制明度量也九百六（921簡）

一篇の末尾。

『珍稀』は簡が全部で二四簡、うち無傷のものは八簡、不完全なものは六簡であること、本篇の最後の一簡には「九百六」の三字が書かれ、全篇の文字の数にあたることを指摘する。

『十三篇』は齊国の法律説に立つ劉海年は、齊国の某大臣が齊王の政策を諫めたものであるとみなしている（戦国齊国法律史料的重要発見―読銀雀山漢簡「守法守令等十三篇」一九八七初出。『戦国秦代法制管窺』法律出版社、二〇〇六年所収）。たしかに、王法篇の簡には899簡・908簡等に見られるように、「臣聞」という臣下からの上言という形式をとるものが見られるが、特定の人物や齊国との関係を示すような記述はみられず、現時点では齊国と結びつける必然性は認められない。ただし、『管子』の経済思想に似通った発想を持つという点では、齊地の思想や社会を反映している可能性は高い。

凡欲富國猋（壘）草仁（仞）邑、必外示之以利、内爲禁邪除害。諸周（雕）文・刻婁（鏤）・補（黼）・紵（黻）・暴（纂）・組・鍼緝（綫）之事、及爲末898作捶（垂）拱倚立談語、皆勿

得爲也。此國之大害、治之大傷、不可不禁。臣聞今世捶（垂）拱牟戎（農）粟而食899者二人、隨戎（農）者一人、與戎（農）者三人、然世審節之而以足。嘗試使三人一歲俱出耨之端、是有三歲900余食也。二歲俱出耨之端、是有六歲余食也。三歲俱出耨之端、是有十歲餘食也。□901……

凡そ國を富まし草を狼（豢）き邑を仁（仞）たさんと欲すれば、必ず外は之に示すに利を以てし、内は為に邪を禁じ害を除く。諸の周（雕）文・刻婁（鏤）・補（黼）・紱（黻）・纂（纂）組・鍼緋（綫）の事、及び耨898作を為し捶（垂）拱倚立して談語せるは、皆な爲すを得るなからしむなり。此れ國の大害、治の大傷にして、禁ぜざるべからず。臣聞くならく「今世捶（垂）拱して戎（農）粟を牟りて食う899者一人、戎（農）に隨う者一人にして、戎（農）に與る者は三人、然らば世は審みて之を節きて以て足る」と。嘗試みに三人をして一歲俱に耨の端を出ださしむれば、是れ三歲900の余食有るなり。二歲俱に耨の端を出ださしむれば、是れ六歲の余食有るなり。三歲俱に耨の端を出さしむれば、是れ十歳の餘食有るなり。□901……

（1）原註は「仁」を音が近いことから「仞」として、「充

満」満たすの意味とする。「豢草仞邑」に類似した表現は、原註・『早大』も挙げる通り、管仲が斉の臣を評したエピソード（『韓非子』外儲説左下・『新序』雜事四・『管子』小匡・『呂氏春秋』勿躬）や蔡沢が呉の大夫種の功績を語った文章（『戦国策』秦策三・『史記』蔡沢列伝）に見られる。同じような内容でありながら、「○邑」という熟語は、文字に異同があることから解釈がわかれる。簡単に整理すると、「納入」（『韓非子』旧注・王先慎・『管子』黎翔鳳）・「充滿」（『呂氏春秋』陳奇猷・『史記』索隱・『韓非子』太田方）・「造」（『韓非子』俞樾・陳奇猷・『戦国策』鮑彪）の3系統に分かれる。王法篇では、文脈から考えて、後に続く「外示之以利、内爲禁邪除害」以降で、邑の新開発に関係する記述はみられないので「造」を意味するとは思えない。原註の通り「充滿」を意味している、と考えるのが妥当であろう。

邑を充実させる対象物は何であるか、という点については、『早大』は『史記』索隱に従い人口を招きよせると解している。しかし、この文章の主題は農業生産の振興とそれによる食糧備蓄の増大であろう。また、文の構造を見ると、「諸雕文……」以下が「内爲禁邪除害」

の具体的説明、「必外示之以利」はレトリックとして「内」に對比するために持ち出された句（もしくは901簡につづく文章に「外」に向けての政策が列挙されていたか）、この「外／内」は「初邑」の方法、「初邑」は「墾草」の条件、「墾草」は「富国」の条件、という富国を最終目的とする因果関係を見出すことができる。「外」に「利を示し」て国外の人口を誘致し、「内」では「禁邪除害」して達成される（具体的には続く「彫文刻鏤」以下の奢侈品生産を禁じ、農業生産に従事させる）ということ、で、「初邑」には人口はもちろん、農業生産物たる穀物の両方を含んでいると考えられるのではないか。

(2) このような「外」と「内」の対比は要言篇819簡、田法篇928簡などでも見られる。他の諸侯や諸侯国の民に自国の「利」（要言篇では「道德」）を見せ付けるとあり、自国の「内」と「外」を強く意識している。ここでは『早大』も指摘するように移住者を募り、自国の邑の人口を増加させ、新たに土地を開墾し、国家を豊かにするという計画であろう。戦国期の民の流動性の高さは、『管子』牧民「国財多ければ則ち遠者来り、地辟くことこころ挙くなれば則ち民処に留る」にもうかがえ、各国はそ

れを意識した政策をとっていたことは『早大』の挙げる

『商君書』徠民の他に、『孟子』梁惠王などにもみられる。

(3) 「彫文刻鏤」は器物に文様を刻みつけること、またはそのような彫刻が施された器物のこと。『管子』重令・『漢書』景帝紀詔・陸賈『新語』道基・賈誼『新書』瑰璋などで、王法篇と同様、民が奢侈品の生産につとめて農業をおろそかにすることを非難する文脈で用いられる。男性の農耕と対になる女性の衣類生産を妨げるものとしては、「美衣錦繡纂組」（『管子』重令）・「錦繡纂組」（『漢書』景帝紀詔）・「黼黻文繡纂組」（賈誼『新書』瑰璋）などが挙げられ、ここでの「黼黻纂組鍼綫」もその類のものである。具体的には、「黼黻」は『淮南子』説林訓に「黼黻の美は、杼軸に在り」、高誘注に「白と黒とは黼と為し、青と赤とは黻と為す、皆な文衣なり。」とあるように織物の上に色糸で刺繡をしたもの。『早大』のいうように特定の模様を刺繡したものにとることもできるが、「黼黻」の語には先の『淮南子』のように派生的に「美しい刺繡模様」という意味もあり、他の「雕文」「刻鏤」「纂組」などが裝飾技術に関する語であることから、一般的な刺繡技術ととるほうが自然かと思われる。

る。なお『塩鉄論』散不足には「今富者は繒繡羅紵し、中者は素綈冰錦す」とあり、刺繡製品「繒繡」は「羅・紵（それぞれ林巳奈夫は網縵の織物・練り絹か、としている）」と並び、無紋の「綈・錦」などに比べて高価なものとされ、林巳奈夫は「繡」を「最も手間がかかり、贅沢とされたもの」という（『漢代の文物』朋友書店、一九九六）。「纂」は、『珍稀』が『漢書』景帝紀の「錦繡纂組」の応劭注により五彩の絹織物であるとするが、『漢書』顔師古注は臣瓚の「許慎云えらく纂は赤組なり」を是とする。「組」は『説文』糸部に「組、綬の属なり」とあり、「纂組」で「くみひも」を総称しているのである。以上の四つはいずれも、そのままでも充分に使用に耐える器物・素材に過剰に加工を凝らした奢侈的な手工芸製品・技術を指している。

原註は「鍼」は「針」の古体、「緝」は「綾」の異体であることを指摘する。針と糸を使った製品ということ、で、『早大』は刺繡の意と推測するが、「黼黻」と重複してしまうので、やや疑問がある。他に該当する特定の加工技術はみあたらないし、単に「針」と「綾」とみては、先の四つの加工技術と並列されるほどの技術とは考えが

たい。ここでは仮に「黼黻」・「纂組」をまとめて補足説明したものとみておく。

簡文のように奢侈的な手工業製品を生産することが農業生産を妨げ、国家に損害をもたらすとし、商工業を危険視する発想は『管子』の権修・治国などにもみられる。金谷治は、権修・治国の「末産」・「末作」が商工業を指し、その禁止が農業生産を保護する重農政策の一環であるとしている（金谷治『管子の研究』「管子の経済思想」岩波書店、一九八七年、参照）。

（４）「戎」字を「農」で読むことについては、銀雀山『六韜』653簡に「戎壹其郷則□□、工壹其郷……」の註で説明されている。この文は宋本『六韜』の「農一其郷則穀足、工一其郷則器足」と一致し、「戎」と「農」の二字は古音が近く、銀雀山竹簡は多く「戎」を借りて「農」に用いていると言う。

（５）原註は、牟は侵奪、とする。『漢書』食貨志下「富商大賈大利を牟る所亡し。」の注に如淳「牟は、取るなり」とあり、また『戦国策』楚策四「今夫れ横人利機を嚙口し、上は主心を干し、下は百姓を牟り、公挙げて私に利を取る。」「漢書』景帝紀「百姓を漁奪し、万民を侵牟す。」

など、よこしまなものどもが不当に民から搾り取るという意味で用いられている。王法篇は奢侈的な手工業生産にたずさわるものを、単に農業生産に従事しないということの問題にしているのではなく、農民から不当に収奪を行う存在とみなしているようである。

(6) 901簡には同一の構造の文章の中に三回「余食」の語が登場するが、先二回の「余」字は「余」であるのに対して、最後の「餘」のみ「食」偏がついている。このように異体字を隣接する文章内で同義に使用するという現象は『十三篇』では他篇でもみられる（兵令篇では戟・伸を陣の意で用いる）。

(7) この部分の「二人」、「一人」、「三人」の関係は意味が取りづらい。仮に「牟農粟而食者」を生産には関与しない消費者、「随農者」を農業従事者、「與農者」を両者をあわせた消費人口と解釈してみた。『早大』は李根蟠「從銀雀山竹書『田法』看戰國畝産和生産率」（『中国史研究』一九九九―四）に従い「随農者」・「与農者」を隷農・自作農と想定し、「牟農粟而食者」二人と一人・三人、計六人で解し、同時に合計三人の解釈もあげる。

『礼記』王制に「国の九年の畜無きは不足と曰い、六

年の畜無きは急と曰い、三年の畜無きは国その国に非ずと曰うなり。三年耕せば、必ず一年の食有り。九年耕せば、必ず三年の食有り。」とあり、同様の記述を賈誼『新書』憂民は「王者之法」とよぶ。王制等では一人による三年間の耕作で一年分の余剰が得られるとする（つまり、一年間では三分の四年間の消費分を生産する）のに対して、王法篇では、一人による一年間の耕作が三人の一年間の消費に等しいとされる。王法篇では著しく生産量が多く見積もられている。

(8) 一人が農業生産にたずさわることで、当人も含めて三人の一年分の食糧をまかなうのが「今」であるのなら、「嘗試」として三人が農業生産に携わった場合、三人×三年分の食糧となる。仮に当人たちの消費分（三人×一年分）を引けば、あまりは三人×二年分ということになり「三歳余食」ではなく「二歳余食」となるはずである。簡文の「余食」を消費分を引き余った食糧と解すれば数が合わない。消費分を引かないものを指しているともなし、「充分な食糧」と解釈した。ただし、三年×三人で三人×十年分を生産するという計算は成り立たないので、数字を厳密に考える必要はないのであろう。

(訳文) そもそも国家を豊かにし、草地を開墾し、邑を人と物で充実させようと望むなら、必ず外に向けては利益を示し、国内には邪惡なことを禁止し、障害となるものを排除せねばならない。そのまま使える器物に彫刻を施したり、刺繍・くみひもなどの針と糸の技をきわめた手間のかかった手仕事に携わったり、商売をして体を使わずに寄りかかって立ち話をしているようなやからは、みなそんなことをさせておいてはならないのである。このようなものは国家にとって大きな障害であり、統治するうえで大きな損傷となり、禁止しないわけにはいかない。臣が聞くところによると、「当世では体をつかわずに人の作った農作物を奪い取って食う者が二人、農業にたずさわる者が一人、つまり農作物を消費するものは全部で三人おり、そこで世の中ではこまごま節約して足りている」という。いまかりにこの三人に一年間全員で農具を持たせて生産に従事させれば、これは三年分の充分な食糧となる。二年間全員で農具を持たせて生産に従事させれば、これは六年分の充分な食糧となる。三年間全員で農具を持たせて生産に従事させれば、これは十年分の充分な食糧となる。……

……上家□畝四、中家三畝、下家二畝。歳十月、卒歳902之食具、无余食人七石九斗者、親死不得含。十月冬衣畢具、无余布人卅尺・余帛人十尺者903、親死不得爲帛(幘)。中□之木把拵(葉)以上、室中不盈百枚者、親死不得爲郭(櫛)。无井者、親死不得浴。904无堂者、親死不得肆(殯)。一縣半狼(壘)者、足以養其民。其半爲山林溪浴(谷)、蒲葦魚鼈所出、薪蒸□□905

……上家は□畝四、中家は三畝、下家は二畝。^①歳十月、卒歳^②902の食具わるも、余食人ごとに七石九斗なき者は、親死すとも含するを得ず。^④十月冬衣畢く具わるも、余布人ごとに卅尺・余帛人ごとに十尺なき者は、903親死すとも帛(幘)を爲るを得ず。^⑤中□の木把拵(葉)以上、室中に百枚に盈たざる者は、親死すとも郭(櫛)を爲るを得ず。^⑥井なき者は、親死すとも浴するを得ず。904堂なき者は、親死すとも肆(殯)するを得ず。^⑦一縣の半は狼(壘)すれば、^⑧以って其の民を養うに足る。其の半は山林溪浴(谷)と爲し、蒲葦魚鼈の出ずる所、薪蒸□□^③905……

(一) 原註は「上家」の下の一文字不明を「地」の字と推測し、上家・中家・下家の三ランクの区分を第九篇田法930(931簡「食口七人、上家之数也。食口六人、中家之数也。食口五人、下【家之数也。】」と関連づけ、この畝数は住宅の土地面積をいったものであるとする。次に引く『周礼』などの記述と比較しても耕地面積として二、四畝というのは考えられないので、従うべきであろう。

「家」を上・中・下に区分する記述としては、戸口を基準とする『周礼』地官小司徒「上地の家七人、任ずべき者家ごとに三人、中地の家六人、任ずべき者二家ごとに五人、下地の家五人、任ずべき者家ごと二人。」がある。土地の作柄と保有する面積の規定として、同地官遂人「上地、夫ごとに一廛、田は百畝、萊は五十畝」以下、予備の耕地である「萊」は、中地では百畝、下地では二百畝となり変化するが、住宅地の面積は一律一廛である。『孟子』梁惠王章句上で孟子は理想的な農民経営形態を述べ、その宅地について「五畝の宅、之に樹うるに桑を以つてせば、五十なる者以つて帛を衣るべし。」とし、王法篇よりもやや広くみるが、等差をもうけるとの記述は見られない。一方、『張家山漢墓竹簡』二年律令314(

316簡(戸律)には爵級により住宅地の面積が規定されている(「宅之大方卅步。(略)公士一宅半宅、公卒士五(伍)・庶人一宅、司寇・隱官半宅。」)。面積を比較すると、二、四畝に相当する(二百四十歩一畝換算)のは一宅(三〇×三〇〇〇〇歩〓三・七五畝)の「公卒」・「士伍」・「庶人」であり、広汎な庶民層といつてよい。

(2) 原註は、十月歳終について、田法篇946簡の「卒歳大息」が『礼記』月令の孟冬之月の「臘祭」と共通することもあり、王法・田法篇では十一月歳首の周正を用いているとする。呉九竜はここから正月歳首の夏正を用いる戦国秦・晋、十二月歳首の殷正を用いる宋・衛での成書の可能性を排除し(「銀雀山漢簡齊国法律考析」『史学集刊』一九八四—四)、劉海年は秦正の統一秦・漢初、夏正の漢武帝太初以降の成書を否定する(「戦国齊国法律史料的重要発見」)。王法篇を現実の制度・法律とみれば確かに成書の時期・地域を考察する手がかりとなるであろう。しかしながら、戦国諸国の暦法については充分に解明されているとはいいがたく、また「王法」である以上、理想化された制度としての周正である可能性もある。

(3)『史記』天官書には「臘の明日、人衆卒歳に一たび飲食に会し、陽氣を發し、故に初歳と曰う」とあり、ここでいう「卒歳之食」とは年越しの共同飲食儀礼の食物を指している可能性もある。

そもそも十月は、『礼記』月令に「孟冬の月(略)百官に命じ、蓋蔵を謹む。司徒に命じ、積聚を循行し、斂めざるあるなからしむ。城郭を壊し、門閭を戒め、鍵閉を脩め、管籥を慎み、封疆を固め、辺竟を備え、要塞を完し、関梁を謹み、徭徑を塞ぐ。」とあるように、物資の収蔵、警備の固さを確認して修繕を行う本格的な冬越し準備の月であり、この孟冬の時令は正月歳首の前漢末王莽執政期とされる敦煌出土の「四時月令詔條」でも採用されている(『敦煌懸泉月令詔條』中華書局、二〇〇一)。また月令には続いて同月に「喪紀を飭し、衣裳を辨じ、棺槨の薄厚、塋丘の壟の大小・高卑・厚薄の度、貴賤の等級を審にす。」ともあり、孟冬十月に葬儀にそなえて儀礼の確認を行っている。王法篇でも年越しの衣食に言及するのが十月なのは自然なことと思われる。

七石九斗とは、李悝の尽地力之教の「食は人ごとに月

に一石半」(『漢書』食貨志上)によると五ヵ月強分に、居延漢簡にみられる戌卒の食料支給量三石三斗三升では、二・三ヶ月分に相当する。

(4)「含」はいわゆる飯含で、原註が言うように、死者の口に含ませる物を指し、玉が代表的である。金鶚が『求古録礼説』『葬礼飯含考』(『皇清經解統編』卷六百七十三)に「以つて口の含む所之を含と謂い、以つて生時の飯を象る之を飯という」などと言うように、生時の食物を象つたものである。『礼記』雜記下に「天子九貝を飯み、諸侯は七、大夫は五、士は三。」と階層による規定が述べられ、庶民層については言及しない。しかし、考古学的資料を整理した間瀬収芳「玲について」(小南一郎編『中国古代礼制研究』京都大学人文科学研究所、一九九五)によれば、含は、必ずしも王朝の支配者層の葬俗というわけではなく、貝・玉などの物の違いはあるものの、貧しい小型墓からの出土例も多いという。庶民層でも親には含をさせるといふ簡文とは乖離しない。『戦国策』趙策三に「鄒・魯の臣、生きては則ち事養を得ず、死しては則ち飯含を得ず。」とあり、生きている時に人に奉仕することと、死んでから「含」することが対になっ

ている。葬俗のなかでも特に重要で代表的なものであったと考えられる。

(5) 原註は、「亡」と「無」の二字が通用することから、「帟」を「幘」と解し、『儀礼』士喪礼の「幘おおに斂衾を用う」の鄭注「幘は覆うなり」により、「帟」は亡骸を覆うのに用いるふとんを指すとする。

『儀礼』士葬礼のしるす葬礼では、「斂衾」・「明衣裳」等の大量の布製品を消費する。『張家山漢墓竹簡』二年律令「賜衣者（略）衾五丈二尺・縁二丈六尺・絮十一斤。」（282簡・賜律）、「官衣、用縵六丈四尺、帛裏、毋絮。常（裳）一、用縵二丈」（285簡・賜律）などの規定と比較すると、布冊尺（九尺）・帛十尺（二・二五尺）とは、官吏の着るような正装を作るのには充分な量ではないようだが、現在の日本の着物物の一反にはおおむね相当する長さである。林巳奈夫は漢代の寝具「被」・「衾」などについて「着物の形をしたよぎの形式のものと思はれる」（『漢代の文物』）という。一着の着物を作るのに用いる長さの反物を、亡骸に着せ掛ける死装束をつくるのに用いるというのは自然なことと思われる。

『詩経』豳風・七月でも「二の日の栗烈、衣無く褐無

くんば、何ぞ以つて歳を卒らん」とあり、冬の寒さをしのぐため、年越しの衣類が必要であるとするが、王法篇は家族全員の冬物衣類をそろえるだけでなく、そのうえに一人分ずつ予備の布地を用意しておくことが必要とされている。

(6) 原註・『珍稀』・『早大』ともに「把葉」を両手でつかめる太さというとする。

『礼記』檀弓には「夫子の中都に制するや、四寸の棺、五寸の椁なり。」注に「孔子嘗て之の宰と為り、民の為に制を作る。」とあり、民の槨の規格として、木材の太さを五寸とする記述がみられる。概ね王法篇の槨の材に相当する大きさといえるだろう。『漢書』循吏伝・黃霸伝では「霸具に為に区処し、某所の大木は以つて棺と為すべし、と。」とあるように、身寄りのない庶民のために「棺」を作るのに立ち木を利用している。

先述の『礼記』檀弓でも、民にも槨があることは想定されているが、『張家山漢墓竹簡』二年律令289簡（賜律）でも「賜棺享（椁）而欲受齋者、（略）五大夫以下棺錢級六百・享（椁）級三百。毋爵者棺錢三百。」とあるように、無爵者には棺錢のみであるが、爵位が低くと

も有爵者には棺・槨の錢を与えるという規定が見られる。

あえて木材が「室中」にあるとされているのは、「槨」が死後の居住空間であり、生前の居住空間である「室」に對比されるためであろう。

(7)「堂」は言うまでもなく、住居のなかで南側に位置しさまざまな儀礼を執り行う表の空間であり、その後ろに位置し私的な居住空間である「室」に對比される。先の「室中」と對比して考えるなら、庶民層の家屋には、居住空間である「室」はあつても、正式な儀礼を執り行う「堂」はない者があり、そのようなものでも相應の葬儀儀礼を行うようである。

原註は「肆」を「殯」に読み、かりもがりのこととし、また『周礼』地官閭師の「凡そ庶民の畜さざるは祭るに牲なく、耕さざるは祭るに盛なく、樹えざるは槨なく、蠶せざるは帛せず、績せざるは衰せず。」との類似を指摘する。劉海年も、「厚葬の禁止は、斉国では早くから規定があり(略)『王法』は貧富の等差を具体的に規定したにすぎない。」という(『戦国斉国法律史料的重要發現』)。ともにこの一文を経済状況に応じた葬礼の規則であると考えているようである。先に引いた月令孟冬の「飭

喪紀……」の記述と関連付けて、「不得」を禁止ととり、規則を述べたものとしても、前半の含・輿については無理はない。しかし、後半部の槨・浴・殯については、禁止規定とみなすのは内容的に苦しい。また、「一縣半壘」以下とも関係がとりづらい。『漢書』食貨志上の李悝の尽地力之教の「不幸にして疾病死喪するの費」と同様に、急の不幸による臨時支出により農民経営が危機にさらされるという認識を示しているように考えられる。全体では、農民の個人的な蓄えや私有地の産物だけでは、突然の不幸に礼になつた葬儀が営めないのも、県領域の半分は農地化しないで、自然の産物を得られるようにしておく、という解釈になる。

(8) 県については、庫法篇で大・中・小の県の面積・人口規模(832簡)、軍事徵発の基準(833・834簡)、県の武器庫に関する記述(836簡)がみられ、兵令篇では軍事警戒線に関わる記述(974～976簡)がみられる。王法篇の県は「一縣半壘」、「其半」などから、山林溪谷等の人の居住しない地域をも管轄する領域をもつた行政区画であつたことがわかる。

(9)「蒲葦」は『荀子』不苟「柔従なること蒲葦の若し」

の楊倅注に「蒲葦は以つて席を為り巻くべき所の者なり」とあるように、「席」つまりむしろの類の原料となる。やみくもに土地を開墾し農地化して、天然資源を枯渇させることのないように、という主張が続くのであろう。

(訳文) ……上家の□(住宅地?)は畝四、中家は三畝、下家は二畝である。一年の終りの十月に、年越しの食料がそろつていても、余分の食料が一人あたり七石九斗(二五三・二六^リ)にみたない者は、親が死んでも飯含を入れてやることもできない。十月に冬の衣服が全てそろつていても、余分の布が一人あたり卅尺(九^リ)・余分の帛が一人あたり十尺(二・二五^リ)にみたない者は、親が死んでも死装束をつくつてやることもできない。中□の木材の両手でつかめる太さ以上のものを住まいの中に百本たくわえていない者は、親が死んでも柳をつくつてやることもできない。井戸がない者は、親が死んでもきよめてやることもできない。儀礼をする堂がない者は、親が死んでもかりもがりすることもできない。もし一県の半分を開墾すれば、住民を養うのには充分である。残りの半分の土地は山林溪谷のままにして、蒲葦や魚鼈と

いった天然・水産資源をうみだすところ、薪蒸□□……

……而婦之。少者曰、我且往長焉。壮者曰、我且往觀焉。老906者曰、我且往死焉。是故不刑一民、不傷一丈夫、而海之外内可得……907

……而して之に帰す。少者曰く、「我且に往きて長ぜんとす」。壮者曰く、「我且に往きて觀んとす」。老908者曰く、「我且に往きて死せんとす」¹。是の故に一民も刑せず、一丈夫も傷けず²、而して海の内外……を得る可し……907

(1) 898簡の「外示之以利」に対応する誘致された他国民の反応を示した文として、ここに配列されたものが。先にも触れたような農民誘致策を反映しているのであろう。

(2) 続く「海之外内」や、要言篇819簡・王法篇898簡・田法篇928簡の「外」・「内」でも自国内と国外を対比している点からすれば、ここの「一民」は自国の民をあらわし国内では刑罰で規制しないこと、「一丈夫」は軍の兵士をあらわし対外戦争で戦傷を負わないことを示していると解することができる。

(訳文) ……そして集まってくる。年若い者は、「私はそこへ行つて成長したい。」といい、働き盛りの者は、「私はそこへ行つて見たい。」といい、年老いた者は、「私はそこへ行つて死にたい。」という。そこで、一人の国民も罰することなく、一人の兵士も傷を負わせることなく、国の内外のあらゆる地域は……を得ることができると。

矣。臣聞之、大國行仁義、明道恵(徳)、中國守戰、小國事養、天地之禮也。故少不可不事長908、賤不可不事貴、貧不可不事【富、亂不可不事治、小不可不】事大、弱不可不事強。少而909不事長、胃(謂)之□□。賤而不事貴、胃(謂)之不遂。貧而不事富、胃(謂)之困道。弱而不事強、胃(謂)之910撓央(殃)。小而不事大、胃(謂)之召(招)害。亂而不事治、胃(謂)之無時。不可不審也。臣聞古之王者、鷄狗之聲相911聞、其人民至死不得相問見也。上非禁其相問見之道也、法立令行而民母以相問見爲也。凡912民爲禮節、相朝夕問見者、外以備患禍、内以備衣食也。臣聞柏(霸)王之國、其民勞能佚之913、飢能食之、寒能衣之、亂能治之。飢弗能食、寒弗能衣、亂弗能治、則外弗能殺、中弗能禁914、内弗能使。上操三者、民外无□□、内无感欲也。杀

之則死、生之則生、欲使之則使、在上915……

……矣。臣之を聞く、「大國の仁義を行い、道恵(徳)を明らかにし、中國の守戰し、小國の事養するが、天地の禮なり」と。故に少は長に事えざるべからず908、賤は貴に事えざるべからず、貧は【富に事えざるべからず、亂は治に事えざるべからず、小は】大に事えざるべからず、弱は強に事えざるべからず。少にして909長に事えざる、之を□□と胃(謂)う。賤にして貴に事えざる、之を不遂と胃(謂)う。貧にして富に事えざる、之を困道と胃(謂)う。弱にして強に事えざる、之を910撓央(殃)と胃(謂)う。小にして大に事えざる、之を召(招)害と胃(謂)う。亂にして治に事えざる、之を無時と胃(謂)う。審にせざるべからざるなり。臣聞くならく、「古の王者、鷄狗の聲相い911聞うるも、其の人民死に至るまで相い問見するを得ざるなり」と。上の其の相い問見するの道を禁ずるに非ざるなり、法立ち令行なわれて民相い問見するを以つて爲す母ければなり。凡そ912民の禮節を爲し、相い朝夕に問見するは、外に以つて患禍に備え、内に以つて衣食に備うればなり。臣聞くならく、「柏(霸)王之國、其の民の勞すれば能く之を佚やすましめ913、飢うれば能く之を食やしなひ、寒ひやうれば能く之を衣せ、亂

るれば能く之を治む⁸」と。飢えて食うあたわず、寒えて衣るあたわず、亂れて治むるあたわざれば、則ち外に杀すあたわず、中に禁ずるあたわず914、内に使うあたわず。上の三者を操らば、¹⁰民外に□□なく、内に感欲することなきなり。之を杀さば則ち死し、之を生かさば則ち生き、之を使わんと欲せば則ち使わる、¹¹在上915……

(1) 要言篇「大國事明法制、飭仁義。中國以守戰爲功。小國以事養爲安。」とよく似た文である。詳細は要言篇819簡註(1)参照。

(2) 原註は「礼」字は「理」と読むべきではないか、とする。その根拠としてテキスト『晏子』第六篇の原註は「礼」と「理」の音、『礼記』仲尼燕居に「礼なる者は、理なり。」をあげる。礼という語自体に道理・あるべき秩序としての意味がふくまれるのであり、「理」と理解することは妥当であろう。

(3) このような上下・貴賤等の秩序関係に関しては、『早大』もあげるように文献にもみられ、『管子』五輔篇では「所謂八経なる者は何ぞ。曰く上下義あり、貴賤分あり、長幼等あり、貧富度あり。凡そ此の八者、礼の経なり。

(略)是の故に聖王此の八礼を飭し、以て其の民を導く。『荀子』仲尼では「少は長に事え、賤は貴に事え、不肖は賢に事う、是れ天下の通義なり。」などとある。このような上下・貧富による秩序は、学派的な思想というよりも比較的一般的な社会通念というべきであろうと思われる。簡文の場合「臣聞之」以下で国家間の関係について述べているので、ここでも国家間の「天地之礼」を具體的に説明するのに、一般になじみのある社会秩序を引き合いに出しているであろう。

(4) 原註は『淮南子』精神訓「能く大貴を知らば、何こに往きて遂ぜざらんや。」の高誘注「遂は通なり。」をあげる。これに従えば「不遂」はつかえて滞ること、「うまくいかない」くらいの意味か。

(5) 原註は「撓」字は「饒」と読むべきではないかとする。その根拠として『広雅』釈詁一「饒、益なり。」などをあげる。一方『珍稀』は『広雅』釈詁三「撓、乱なり」をあげる。「不遂」を除く他の二字句は〔述語＋補語〕で構成される。それに準じれば原註に従い「撓」を「益」などでとり、「撓央」で不運を増やしてしまうことと解するのが自然かと考えられる。

(6) 以上、六種類の社会秩序とその混乱状況を指す呼称が挙げられていた。文字の読み取れない「少」「長」に対するもの以外の五種は、おおむね社会の秩序をわきまえないがために、自ら困難を引き起こして苦勞する、という意味で理解することができると同じような社会秩序に対する言及ではあつても、『管子』五輔は「聖王」と関連付けられ、為政者が民を統治するためにのつとるべき秩序、という位置づけであるのに対して、王法篇の場合は、混乱状況を指す呼称からすると、人々（この場合は派生的に国家の關係に適用されているのであるが）が無駄な苦勞を背負い込むことなく生き抜くための処世訓のようでもある。

(7) 原註は『老子』「隣国相い望み、鶏犬の声相い聞うるも、民老死に至るも相い往来せず」をあげる。この「小国寡民」の一節では「其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の居に安んじ、其の俗を楽しむ」という精神的内面的な安寧が保たれた状態とする。一方、王法篇では、続けて民が「問見」する目的を「患禍」・「衣食」に備えるためとしていることから、外敵の脅威・食糧衣服の欠乏のない安全や物質的充足こそを安定とみなしているようである。

ある。また「問見」という語からは『儀礼』士相見礼篇や『礼記』曲礼の「礼は往来を尚ぶ」の語のように儒家的な礼秩序が想起されるが、簡文ではこのような民のあいだでの交流を物的な脅威・欠乏に備えるための死活問題ゆえに行われるものとして、むしろそれが行われない社会をこそ理想としているようである。

(8) このような発想は『管子』牧民「政の興る所、民心に順うに在り。政の廢する所、民心に逆らうに在り。民憂勞を惡めば、我之を佚樂し、民貧賤を惡めば、我之を富貴たらしめ、民危墜を惡めば、我之を存安し、民絶滅を惡めば、我之を生育す。」にも見られる。

(9) 兵令篇987～988簡「能杀其少半者力加諸侯、能杀其什一者……」は、宋本『尉繚子』兵令篇との比較から、威令が行き届き自軍の兵士を戦死させられる国が他国を圧倒するとの意味で理解できる。本簡の「杀」もまた自国の民に命を惜しませず戦死する覚悟で戦わせると理解した。

(10) ここで言う「三者」には二つの可能性が考えられる。一つには『早大』のいうように直前の「外」・「中」・「内」の場で民を「能殺」・「能禁」・「能使」と制御・利用する

こと。ただしこの場合「お上が外・中・内の場で民を制御・利用しこなせば、民は外で……、内で……」ということとなり、「条件」↓「結果」の二節の内容が類似してしまい主旨が不明確となる。もう一つの可能性としては、その前の民が「飢」・「寒」・「乱」という状況にあるとき、彼らに必要なものを与えることである。こちらのほうが意味は通じやすいが、そのまた一つ前の節では「勞・飢・寒・乱」の四つの状況について述べられている。伝写の過程で、脱落と再整理を経た結果、このような状態になったという可能性も考えられる。

(11)先に「殺」・「禁」・「使」であったものが、ここでは「殺」・「生」・「使」となり一致せず、「外」・「中」・「内」の場の違いも語られない。「使」にのみ「欲」字が入っているなど、文章としてあまり整っていないという印象をうける。そもそも「外」・「中」・「内」が対比されているが、『早大』もいのように国外・国内・国内となり、「中」と「内」の違いがよくわからない。

(訳文)……。臣が聞くところによると、「大国が仁義を實踐し、道德をはつきり示し、中国が自国を守りつつ他

国と戦い、小国が大国に仕える、というあり方は、天地を貫く道理である」という。それゆえに年少者は年長者につかえざるをえず、卑賤な者は貴人につかえざるをえず、貧しい者は富む者につかえざるをえず、混乱した状況にある者は安定した者につかえざるをえず、勢力の小さい者は大きい者につかえざるをえず、弱者は強者につかえざるをえないものである。年少者でありながら年長者につかえないことを□□といい、卑賤な者でありながら貴人につかえないことを不遂(うまくゆかない)といい、貧しい者でありながら富む者につかえないことを困道(道理にくるしむ)といい、弱者でありながら強者につかえないことを撓殃(わざわいをふやす)といい、勢力が小さい者でありながら大きい者につかえないことを招害(さまたげをまねく)といい、混乱した状況にありながら安定した者につかえないことを无時(時勢をないがしろにする)という。このような道理ははつきりわきまえておかねばならないのである。臣が聞くところによると、「古の王者が治めている下では、鶏や犬の鳴き声が聞こえるほどごく近所であっても、そこに住む民たちは一生を終えるまでお互いに付き合ひすることがな

かった」という。それはお上の方から彼らがお互いに付

き合いするのを取り締まっているためではなく、法律が制定されて命令が行き届いており民はお互いに付き合いついて融通をつけようとするのが自然とおこらないのである。そもそも人民が礼節を実践し、互いに朝な夕なに付き合ひしあうのは、外からやってくる災いを防ぎ、内輪で衣・食の不足にそなえるためなのである。臣が聞くところによると「霸王の国では、国民が疲れていれば安んじ楽しませ、飢えていれば食べ物を与え、凍えていれば衣類を与え、混乱していれば静めるものだ」という。飢えているのに食べ物を与えてやることができず、凍えているのに衣類を与えてやることができず、混乱しているのに静めることができなければ、自国民を外の敵に向かつては戦死させることができず、国の中では取り締まることができず、国内では働かせることができない。お上がこの（食料・衣類・安定の）三つの点をたくみに使いこなせば、民は外に向かつては……することなく、国内では心配したり欲しがったりすることがなくなるのである。そうすれば民は戦死させようとすれば喜んで死んでくれ、生かそうとすれば生きてくれ、働かせたいと望

めば働いてくれる、……。

□□能審此三者、柏（霸）王之道也。不能審此三者而言王者、是虚而爲大、跂而爲長、臣以爲莫（難） 916。

……能く此の三者に審らかなるは、柏（霸）王の道なり。此の三者を審らかにする能わずして王者を言うは、是れ虚にして大と爲し、跂して長と爲すものにして、臣以つて莫（難）しと爲す 916。

（1）テキストは先の915簡と916簡をそのまま接続する。しかし模本をみると両簡は編綴の縄跡にずれがあり、916簡の冒頭二字は不明で文章として直接つながるといふ確証もないので、ここでは分けておく。ただ文中には「臣」が登場し、上奏文風のスタイルをもつ文章のまとめの部分であることは確かである。908→915簡の一連の文章の後に置くテキストの配列は蓋然性が高い。

（2）916簡が908→915簡の後に続くとする
と、この「三者」が何を表しているのかについては、三つの可能性が考えられる。まず前段注（10）と同じく

914・915簡の民を「死」・「禁／生」・「使」することだが、これだけで「霸王」への「道」が開かれるとは思いがたい。二つめは914簡の民に「食」・「衣」・「治」を与えることである。これならば「霸王之国」ではじまり「霸王之道」で結ばれることになり対応関係としてはよいが、逆に「勞」と「佚」を含み四項目ではじまることが目に付く。三つめは、よりテキストの整理に制約されてしまう解釈ではあるが、908簡から915簡の三つの「臣聞」からはじまる文章それぞれを指しているとするものである。「臣聞」の句には「大国・中国・小国」・「古之王者」・「霸王之国」のあり方を示す引用文が続き、それぞれその部分でその内容にまとまりがある。また最初の「臣聞之」の一段の最後には「不可不審也」(911簡)とあり、916簡の「能審此三者」と呼応しているともみることができよう。そのように理解すれば、①国家間の上下関係を尊重する、②民の心配ごとをなくす、③民の欲求を満たす、という三つの条件を体得してはじめて霸王となることができる、という趣旨になる。

(3)この二文に登場する「霸王」・「王者」の関係について、『早大』は考察編で「王と覇はそれほど厳密に区別され

ていなかった」と言うことからすると、「霸王」≡「王者」とみなしているようである。しかし、同じことを重複して言っていると取るよりも、「不能審此三者而言王者」が虚勢を張るさまに喩えられていることからすれば、「霸王」と「王者」は段階的な区別があり、本来、霸王になつてはじめて次の段階である王者に進むべきなのに、霸王の条件も押さえていないうちに王者について語るものを非難しているとも解することができる。

(訳文) ……よくこの三つの条件をわきまえることが、霸王となる道につながっているのである。この三者をはつきりわきまえることもできないのに王者について語ろうとするのは、まさしく中身もないのに大きいとしたり、爪先立ちをして背丈があるように見せかけるようなものであり、臣は難しいことだと考えるのである。

□□□□之□□□□□□□□也、□□□□□□也、所以
□長少也、所以和六親也、所以917……

……の……なり、……なり、長少を……する所以なり、六親
を和する所以なり。所以917……

(1) テキストは917簡と918簡を連続させているが、この二簡の接続については疑問がある。まず模本によれば両簡の編綴の縄跡は二条とも1cm程度のずれが認められる。文の構成上も、918簡の冒頭は「富国」で、次の一文は「国富則民衆」ではじまる。つまり918簡には917簡の「□長少」・「和六親」に関わる記述は含まれていない。整理小組は「所以○○」という句形から一連のものとみなしたようであるが、内容上も917簡の二句は家族倫理に関連するのに対して、「富国」以降は国家の統治に関するもののである。ここでは関連付けずに理解することとした。

(訳文) ……年長者と年少者を……するためであり、親族をむつまじくさせるためである。……

富國也、所以強兵也、所以廣土也、所以尊主也、所以行令也。
國富則民衆、民衆則兵強、兵強則土廣、土廣918則主尊、【主尊】則令行、【令行】則敵人制、【敵人制】則諸侯賓服、【諸侯賓服】則□立、□立則王者之翹治也。不可不審也。古之919……

国を富ます……、兵を強める所以なり、土を広める所以なり、主を尊ばるる所以なり、令を行う所以なり。国富めば則ち民衆く、民衆ければ則ち兵強く、兵強ければ則ち土広く、土広ければ918則ち主尊ばれ、【主尊ばるれば】則ち令行われ、【令行われれば】則ち敵人制され、【敵人制せらるれば】則ち諸侯賓服し、【諸侯賓服すれば則ち□立ち、□立てば則ち王者の翹治^{おき}まるなり。審らかにせざるべからざるなり。古の919……

(1) 「翹」字は『説文』羽部に「翹、尾の長毛なり。」とあり、もともとは鳥の高く挙がつた尾羽のことであり、段注が「按ずるに、尾の長毛は必ず高く挙ぐ、故に凡そ高く挙がるは翹と曰う」と言うように、尾羽のように高く盛んなさまを示す。『早大』は「翹治」を「繁栄した治世」と訳す。しかし、「国富」以下「諸侯賓服」までの八つの語はそれぞれ「主語＋述語」で構成されており、「□立」もその可能性が高い。すると締めくくりにあたる「王者之翹治」も「王者之翹」が「治」となるという「主語＋述語」で構成されていると取ることができる。管見の限り「翹」が「治」を述語とするような名詞として用

いられている例は見られないが、文章の一貫性を尊重し、仮に「翹」を「繁榮した状況」、「治」を「おさまる」、「安定する」などの動詞と解しておいた。

(2)『早大』も挙げているように『管子』重令・治国・形勢解などにも類似した表現はみられ、比較的身近な課題から最終的な「王者」の段階を指すという。富国強兵の主題にふさわしい表現である。

(訳文) 国を富ますためであり、兵力を強めるためであり、領土を広げるためであり、君主を尊くするためであり、命令を実行するためである。国家が富めば人口は増え、人口が増えれば兵力は強まり、兵力が強まれば領土は広がり、領土が広がれば君主は尊ばれ、君主が尊ばれば命令は実行され、命令が実行されれば敵は制圧され、敵が制圧されれば諸侯は来朝して服従し、諸侯が来朝して服従すれば□が立ち、□が立てば王者による繁榮が安定する。このことをはつきりわきまえておかねばならないのである。古の……

帝者胃(謂)人黔人、王者胃(謂)之黔首、柏(覇)者胃(謂)

之民、諸侯胃(謂)之明(萌)。王者必明道恵(徳)、飭仁義、爲920……

帝者は人^①を黔人と胃(謂)い、王者は之を黔首と胃(謂)い、柏(覇)者は之を民と胃(謂)い、諸侯は之を明(萌)と胃(謂)う。王者は必ず道恵(徳)を明らかにし、仁義を飭え、^④爲920……

(1)「謂人黔人」については、仮にテキストに従い最初の「人」字をそのまま人民の意味で訳す。しかし、文章としては、次の「謂之黔首」のように「之」字の方が自然で、誤写の可能性がある。

(2)この一文は統治者の階層を「帝者・王者・覇者・諸侯」、その人民を「黔人・黔首・民・萌」と整然と区別している。統治者の呼称を区別することは「帝者は氣を同じくし、王者は義を同じくし、覇者は力を同じくし、勤者は居を同じくして則ち薄く、亡者は名を同じくして則ち脩し。」(『呂氏春秋』有始覽応同)、「帝者は師と処り、王者は友と処り、覇者は臣と処り、亡国は役と処る。」(『戦国策』燕二)などに類例がみられるが、被統治者の呼称を変えるのは、他の文献では見られない。

また十三篇の中には統治者や国家をランク分けした呼称が他にも見られるが「大国」・「中国」・「小国」（819簡・908簡・951簡）、「王者」・「霸者」・「中国」・「小国」（875簡）、「民」・「諸侯」・「小国」・「中国」（以下断裂）（876簡）、「王」・「霸」・「存」・「亡」（932簡）と、複数の基準が混在しているようではつきが目立つ。このようなならばつきは十三篇自体のまとまりのなさ（整理が不十分、もしくはそもそも文章全体としての整合性を重視しない）を示しているように考えられる。

（3）要言篇819簡「大国事明法制、飭仁義、（略）大国外示諸侯以明道德」、王法篇908簡「大國行仁義、明道德」と対照すると、ここでいう「王者」は「大国」・「中国」・「小国」の三段階のうち「大国」に相当する。

（4）原註はこの920簡を上919簡とつなげて「古之帝者謂人黔人」という一句として読む可能性を指摘する。

（訳文）帝者はその人民を黔人とよび、王者は黔首とよび、覇者は民とよび、諸侯は萌とよぶ。王者は必ず道德の模範を示し、仁義の徳目を立派にし、為……

……法制、明度量也。九百六921¹

……法制、度量を明らかにするなり。九百六921²

（1）原註は921簡を上920簡とつなげ「王者必（略）、明度量也」という一句として読む可能性を指摘し、『早大』はそれを取る。しかしそのように読んで直接篇の最終簡までつなげてしまうと、あえて「帝」・「王」・「霸」・「諸侯」とそれぞれの民の名称の区別を示した意味がない。920・921簡の間に関連する議論が展開されているか、二簡が直接関係しない可能性もあるだろう。

（2）『早大』は「現存文字数は七五五字であるから、約一五〇字つまり整簡にして約三簡分を欠いている計算になる」という。しかし冒頭で指摘したように、我々はテキストの復元を暫定的なものとして見ており、単純に三簡欠けているとみなすことはできないと考えている。

（訳文）……法制、ものさし・ますなどの基準を明確にするのである。九百六文字

〔付記〕「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註（五）」で発

表した訳註は、名古屋大学大学院文学研究科東洋史学研究室の二〇〇三年度大学院演習において江村治樹教授の指導のもと、検討した成果の一部である。演習において本篇の検討を担当したのは原田昌則・飯田祥子・黒田耕平・田村友一の四名である。公表にあたって飯田祥子が整理を行った。

(いいだ さちこ) 名古屋大学文学研究科博士課程)

